



ビクトル・ユーゴー作「レ・ミゼラブル」の一部。過去に罪をおかした主人公が、自分が犯した罪で他人が捕まったと聞いて、罪もない人間が自分のためにとられることに思い悩み、心は大きくゆれ動きます。そして、ついに決心して、真実をつげるために裁判所へかけつけ、自らの罪をあっさりと認めてしまうのです。「偉大なる不幸な人は、顔に微笑を浮かべながら言った。それは勝利の微笑であり、同時にまた絶望の微笑でもあった。」・・・

とまあ、「レ・ミゼラブル」のような、人の生命にかかわるおおげさなことではなくても、日常のさまざまな生活のなかでこれとよく似たことはどこにでもあるように思います。

期末テストを返却して、採点まちがいがないかどうかをみなさんに確認してもらっていたところ、ある人がやってきて、「まちがっているのにマルになっています」と・・・なるほど採点ミスです。答えが合っているのに×になっているときには、「先生！採点まちがいや！」と鬼の首でも取ったかのように言いに来ます。でも、その逆で、まちがっているのにマルになっているとき、先生に言いに行くことができるでしょうか。

その人にとってはきっと大きな迷いがあったのだろうと思います。「黙っておこうか・・・わざわざ言いに行くより、黙っておいたほうが得になるし・・・」そのいっぽうで「やっぱりしょうじきに言いに行かなければ・・・わずか2点ごときで自分の心をまげていいものだろうか・・・」大きな「良心のたたかい」がそこにあったにちがいありません。そのたたかいに勝った生徒の顔は、まさに「勝利の微笑」をうかべていたように見えました。

この種のまちがい（先生が採点まちがいをするということ）ってよくあることです。たとえば買い物をしたとき、お店の人がおつりをまちがえたとか・・・おつりが多かったときには黙っておいて、足りたときだけ文句を言う。まあそこまで攻撃的でなくても、ちょっと得した気分になって「ラッキー！」なんてことはよくあるように思います。おつりが100円多かったから「ラッキー！」で、これが1万円ならどうなのかということ、いやいや金額の問題ではないという気もするのですが・・・



じつは、編集長の学生時代にも同じようなことがありました。あれはたしか、理科のテストだったと思います。書いた答えが明らかにまちがいであるにもかかわらず、そこに大きなマルがつけてあったのです。何のためらいもなく大きなマルが・・・言うべきか、それともだまっておくべきか、迷いに迷いました。

そして頭に浮かんだことは、「ひょっとしてこれはためされているのではないか」ということ。つまり理科の先生はわざとまちがっているところにマルをつけて、言いにくさかどうかをためしているのではないかと。そんなふうを考えて先生の顔を見ると、チラッと視線があって、何かを目でうたえてきているようにもみえるのでした。「これはまずい」と思い、採点まちがいをしょうじきに言いに行きました。先生は「ああ、ごめんな」と言うだけで、何ごともなかったかのような顔。

このことは編集長の勝手な思い過ごしであつたのかもしれませんが。先生が良心をためしたなどということはなかったのかもしれませんが。いや、きっとなかったにちがいありません。そんなめんどろなことをするわけがないからです。ほんとうのことはもちろん今でもわからないままですが、とにかくすっきりさせたかったのです。なんとも罪深き「採点まちがい」でした。